No.	提　　案　　名	提 案 団 体 名	
		代表者氏名	所　　属
4	みどりで魅せる宇都宮のまちづくり	**宇都宮共和大学　都市･アメニティ研究会**	
		佐々木　賢太	宇都宮共和大学　シティライフ学部

指導教員 氏　　名	**山島　哲夫**

１．提案の要旨

2008 年春、宇都宮市は「第５次宇都宮市総合計画」（通称：V-Plan）を策定し、中心市街地を拠点にしたネットワーク型コンパクトシティ（連携・集約型都市）を目指す方向を示した。これにより、拠点となる中心市街地（まちなか）の魅力を高めていくことが求められることとなる。多くの人々が「住んでみたい」、「行ってみたい」、「楽しく過ごしたい」と思えるような魅力あるまちなかへと成長させることが、ネットワーク型コンパクトシティを達成する重要なポイントとなる。

しかし、宇都宮のまちなかは 2006 年以降、宇都宮城址公園の整備、オリオンスクエアの完成、表参道スクエアのオープンなどいくつかの整備が行われているが、現状では十分魅力的であるとは言えない。当研究会では、その大きな理由の一つとして「みどりの存在感が薄い」ということが挙げられるのではないか、と考えた。そこで今回、「みどり」をテーマにしてまちなかの魅力を高めるための提案を行う。

なお、この提案を作成するにあたって、当研究会では**「魅力あるまちなかを考える～杜の都仙台のみどりに学ぶ～」**と題したフォーラムを開催した[1]。本学副学長で草地学・自然・生態学が専門の大久保忠旦氏、「仙台市建設局百年の杜推進部」の職員の方、仙台市でまちづくり活動を実践している「特定非営利活動法人 都市デザインワークス」の代表の方をお呼びして、まちなかのみどりとまちづくりについてご講演いただき、分科会では本学学生・市民・専門家が一緒になって議論した。

２．提案の目標と意義

V-Plan では、基本構想の中のまちづくりの戦略的ターゲットとして「みんなが幸せに暮らせるまち」、「みんなに選ばれるまち」、「持続的に発展できるまち」を 15 年後に達成することを目標とし、各種重点課題に取り組むとしている。その重点課題の中でもみどりと関連があるものでは「安全で安心な生活環境の創出」、「魅力ある拠点の創造」、「環境調和型社会の構築」、「都市の個性づくりと発信」、「地域が主体となったまちづくり」がある。また、都市構造の側面でも、30 年、50 年先を見据えた長期的な都市空間の形成に向けた第一歩を踏み出す必要性があると記されている。

当研究会は、みどりを通してまちなかの魅力を高めることをはじめとして、V-Plan の目標を達成するために、みどりが有効な手段となると考えている。

しかし、現状では、まちなかに十分な街路樹も少なく、みどりに対する施策・意識も十分ではない。その状況を改善し、まちなかのみどりを豊かにするにはどうしたらよいのか提案する。

---

[1] 平成 20 年 10 月 18 日、宇都宮市内のコンセーレ（栃木県青年会館）において、財団法人栃木県青年会館主催、当研究会企画で開催した。約 40 名（市民・学生・環境や都市の専門家等）の参加をいただき、第１部講演会での「都市と自然」、「仙台市の都市緑化～百年の杜づくりとみどりの事業～」、「『杜の都』仙台の魅力～杜の都のまちづくり～」の３つの講演と、第２部分科会での参加者全員による議論によって大変有意義なフォーラムとなった。

３．街路樹とみどりの機能

提案の前に、街路樹とみどりの機能を確認する。同時に、なぜまちなかにおいてみどりを豊かにする必要があるのかについても考える。

3.1. 街路樹の機能

街路樹は、様々な機能があるが、一般的には**表１**に示す６つの機能が求められているといわれている[2]。

表１　街路樹の主な機能

機　能	具体的な機能
景観向上機能	・街並みを装飾、修景する ・景観的に好ましくないものを遮蔽する ・周辺のみどりとの調和を図る
生活環境保全機能	・沿道の排気ガス汚染を緩和する ・交通騒音を低減させる ・風を除ける
交通環境保全機能	・日陰を作り、快適な歩道を創出する ・地面への直射日光の照り返しを防ぐ ・歩道と車道を空間的に分離させる ・道路の線形を視線的に誘導する
自然環境保全機能	・都市の生態系を維持・保全し、豊かにする ・生態回廊としての役割を有する →緑地を連続させる等の配慮が必要
防災機能	・吹雪・強風を遮蔽する ・火災の延焼を防止する
避難機能	・火災や震災時の避難空間を確保する ・火災時の猛煙のなかで避難経路を示す

3.2. みどりの機能

街路景観の好ましさは、視界の中にみどりの量が多くなると「個性的だ」、「涼しそうだ」「のびのびしている」、「整理された感じだ」などといった理由から好ましさが向上すると言われている[3]。

この結果から、みどりが豊かな街路は景観の好ましさを高めることがわかる。

また、生態回廊としての役割を果たすことも重要だとされている。生態回廊とは、都市内のみどりと都市周辺の緑地とを連続させ、動植物の移動経路を確保し、生物多様性と生態系の保全を目的とするものである。

---

[2]参考資料「街路樹の緑化工―環境デザインと管理技術」より整理

[3]藤原宣夫・田代順孝：好ましさからみた道路植栽の形状に関する考察、造園雑誌、45(5)、263-268、1984 による

４．現状の分析と課題

宇都宮のまちなかにおけるみどりの現状と課題を把握するため、宇都宮市公園緑地課、宇都宮市道路維持課、栃木県環境森林政策課、栃木県宇都宮土木事務所、国土交通省宇都宮国道事務所にヒアリングを行った。その結果も踏まえ、現状と課題を整理する。

4.1　維持管理の問題

宇都宮のまちなかでは戦後復興の際、県木であるトチノキが街路樹として多く植えられた。現在でも大通りや県庁前通りをはじめとしてその多くが残存している。

しかし、トチノキは葉が大きいため落ち葉のボリュームも大きく、秋になると住民から行政機関へ「落ち葉を処理してほしい」という苦情が相次ぐとのことだった。また、葉が茂っている時期には「虫や鳥が集まってくるので対処してほしい」との苦情も寄せられるとのことだった。しかし、行政が街路樹にかけられる費用や人員はどうしても限られ、落ち葉の掃除や細かい手入れなどに手が回らない状態となる。剪定する際に、後々苦情が出ないように樹木を強めに剪定し、葉を茂りにくくする必要が生ずる。結果的にまちなかにある街路樹は**写真１・写真２**のような姿になる。

写真１　上河原通りのケヤキ

（2007 年 11 月撮影）

写真２　大通りのトチノキ

（2008 年６月撮影）

写真１は上河原通りにあるケヤキの街路樹である。かつては葉が茂っていたが、大量のムクドリのねぐらになった結果、苦情が相次ぎ、このような姿になってしまった。枝はすべて切り落とされ、もはや街路樹とは呼べない状況である。**写真２**は大通りにあるトチノキの街路樹だが、本来なら最も葉が茂る夏の時期にもこの程度の葉しか茂っていない。

こうした現状では「街なみを装飾・修景できない」、「夏でも歩道に日陰ができない」、「交通騒音を低減できない」などといったように、街路樹・みどりとしての機能をほとんど果たせていない。せっかく街路樹があってもまちなかの魅力を向上させる働きをしていないのである。

一方で、中央通り（愛称：シンボルロード）の県庁から本町交差点までの区間は見事なトチノキが街路樹として存在している（**写真３**）。この区間は、トチの実を落とす作業を外注するほかは県の職員が落ち葉の清掃をするなどしているため、しっかりした街路樹が維持されている。つまり、トチノキでも維持管理の仕方しだいでは街路樹として使用可能であ

ることを示している。実際にパリではトチノキ（マロニエ）の並木がポピュラーで、他にも大きな通りに多く用いている都市がある。

しかし、それは逆にみどりを守る意識の下での維持管理がなければ街路樹として用いることは難しいということも意味している。苦情が相次いでいて細かい対応には限界のある宇都宮では、この県庁前の区間以外の街路樹として、トチノキは最適のものとは言えないと考えられる。

写真３　シンボルロードの街路樹

（2008 年６月撮影）

4.2　意識の問題

いくら街路樹の維持管理が困難な状況下でも、その機能をほぼ失ってしまっている状況のままにしてあるということも問題である。また、街路樹は生態系・生物多様性を確保する役割を担っていることからも、維持管理のしやすさなど管理側の都合だけで済む話ではないと考えられる。

また、まちなかに**写真１・写真２**のような街路樹があると、まちなかの魅力は向上せずに逆に低下しかねない。強めの剪定によって維持管理の課題を解決しようとする一方で、まちなかの魅力に対する意識が薄れているのもまた現状である。

4.3　みどりの存在とまちのイメージ

現状では宇都宮のまちなかではみどりの存在感が薄くなっている。街の玄関口である JR 宇都宮駅の西口デッキからまちなかを展望してもそれがよくわかる（**写真４**）。まちのイメージは第一印象（行ったときに見た“ぱっと見”の印象）の良し悪しで大きく左右される。しかしながら今の宇都宮のまちなかに対しては「いい景色だ」、「きれいな景観だ」、「楽しそうだ」、「魅力的だ」という印象は浮かびづらい。

V-Plan 達成のためにはまちなかの魅力を向上させることが必要だが、それにはみどりを豊かにすることが必須である。

写真４　宇都宮駅西口の展望

（2008 年６月撮影）

4.4　仙台と宇都宮との比較

杜の都として有名な仙台と比較すると、みどりの存在によってどれほど街のイメージが違うかがわかる。仙台・宇都宮の両駅前と、両市のメインストリート（青葉通りと大通り）を写真で比較したものを**表２**にまとめる。

表２　仙台と宇都宮のまちなかの比較

	仙台	宇都宮
駅前		
メインストリート		

仙台でも、街路樹の落ち葉や鳥・虫に対する苦情はある。しかしながら、市民・企業・行政が一体となって「杜の都仙台」をつくっているという意識のほうが強い。

また、みどりや街路樹に対する市の施策も充実している。みどりの「保全」、「創出」、「普及」を重点とした「杜の都の環境をつくる条例」の策定や、私有地の緑化に対する助成金制度も実施しており、緑化に対して顕著な功績を収めた住民や企業の表彰もしている。

まちなかには、**写真５・写真６**のように店舗をセットバックして緑化用の敷地を確保しているものや、わずかな敷地でも緑化している店舗が見受けられる。

写真５　セットバックして緑地を設けた例　**写真６　わずかな敷地でも緑地を設けた例**

仙台が杜の都となった起源は江戸時代までさかのぼる。そのころは街の外郭が緑化の中心だったが、戦災復興の際にまちなかの緑化も推進し、現在の姿になった。

すなわち、江戸時代からの仙台の歴史はみどりと共に歩んでおり、だからこそこういった街になっている。宇都宮も、長い年月をかけてみどりが豊かなまちなかを作っていく姿勢を持たねばならない。

５．施策事業の提案

5.1 具体的な提案

宇都宮のまちなかのみどりを豊かにするためには、今まで挙げてきた問題をクリアする必要がある。そこで、「みどりが変えるまちのイメージ」、「みどりと暮らすまちなかづくり」、「みどりに対する意識を変える」の３つを柱としてその方法を提案する。提案の全容を**表３**にまとめる。

表３　提案の全容

A．みどりが変えるまちのイメージ

	提案の概要	現状と課題	提案の説明	ねらい・効果
1	宇都宮駅西口の駅前を緑化する。	まちの第一印象を決める場所だが、みどりが少なく良いイメージを与えにくい。	駅前デッキにシンボルツリーを設置するほか、駅から宮の橋交差点までの道路を集中的に緑化する。	宇都宮の玄関口にみどりを設置することで、まちの第一印象を向上させる。
2	田川沿いのシダレザクラを大きく育て、密度を濃くする。	せっかく花が咲いてもまばらな印象を与えてしまう。	大きく育て、花の密度を濃くする。	桜の花の存在感を出し、季節感あふれる景色を演出する。
3	駅東の再開発エリアにトチノキで小さな公園をつくる。	緑がたくさんある公園が駅前にない。	公園にすることで街路樹よりも維持管理が容易。市民の憩いの場にもなる。	来訪者の目に付きやすい場所にみどりを創出することによって、まちの印象をアップさせる。

B．みどりと暮らすまちなかづくり

	提案の概要	現状と課題	提案の説明	ねらい・効果
4	街路樹の配置を見直す。	宇商通り～今小路通りや、駅周辺の奥州街道には街路樹がなく、緑地帯もないに等しい。	ハナミズキを植える。また、街路樹としてトチノキの維持管理が困難な区間は移植し、ハナミズキに植え替える。	５の生態回廊の一部となるほか、街路樹の設置によって快適な道路になる。
5	生態回廊を作り出す。	それぞれのみどりが独立していて、連続していない。また、過度の剪定により樹木としての役割を果たせなくなっている。	街路樹や緑地帯を整備し、連続したみどりを確保する。	ただまちなかにみどりを配置するのではなく、しっかりとした役割を持たせる。また、回遊性の向上も狙える。
6	まちなかの公園にシンボルツリーを設置する。	公園自体があまり利用されていないほか、ほとんどの公園でみどりの要素が少ない。	街路樹としてトチノキの維持管理が困難な場所からトチノキを移植する。	公園のシンボルになるほか、木陰のある公園として憩いの場になる。

C．みどりに対する意識を変える

	提案の概要	現状と課題	提案の説明	ねらい・効果
7	街路樹の剪定方法を見直す。	維持管理上の問題から必要以上に剪定が行われ、街路樹としての機能を果たしていない。	市域全体の見直しは困難だが、まちなかの一定の区間では適時・適切な維持管理を心がける。	街路樹としての機能を持たせ、まちなかのイメージアップや５の生態回廊創出に貢献する。
8	みどりに関するフォーラムを開催する。	イベントは行われているが郊外の森林に対するものが大多数で、まちなかのみどりに関するものは少ない。	行政・住民・企業が広く参加してみどりやまちなかの魅力に関して議論する場を設ける。	まちなかの魅力とみどりの豊かさの関係を知ってもらい、魅力あるまちなかを目指すための土台をつくる。

5.2 提案の詳細

5.2.1「みどりが変えるまちのイメージ」

来訪者や市民にまちの印象を決める宇都宮駅周辺に対していいイメージを持ってもらうための提案である。

〇宇都宮駅西口の駅前を緑化する（表３の１番・以下同じ）

まちの第一印象を決める駅周辺だが、**写真４**で示したとおり現状ではみどりが少ない。そこでまず、駅前のデッキにシンボルツリーを設置する。これは魅力あるまちなかの象徴という役割だけではなく、待ち合わせスポットや路上ライブの会場として活用することもできる。また、デッキから宮の橋の交差点までの道路を集中的に緑化する。これによってみどりの存在感を出し、駅前からの風景が魅力を感じられるものにする。

〇田川沿いのシダレザクラを大きく育て、密度を濃くする（２）

駅周辺の田川沿いにはシダレザクラが植えられているが、現状では**写真７・８**のように、せっかく花が咲いてもまばらな印象を与えてしまう。そこで、シダレザクラを大きく育て、花の密度を濃くする。すると春には田川沿いがシダレザクラでいっぱいになり、季節感あふれる景色が演出される。さらに、川沿いの遊歩道に簡単な花見ができるスペースを設けると、まちなかの見所を増やすことができる。

写真７　田川沿いのシダレザクラ（現状）

写真８　田川沿いのシダレザクラ（現状）

〇駅東の再開発エリアにトチノキで小さな公園をつくる（３）

駅東の再開発エリアは宇都宮駅のホームから見える位置にあり、来訪者にも目に付きやすい。この場所にトチノキで公園をつくることによって、魅力あるまちのイメージをつくりだす。「宇都宮は駅前に公園がある」という印象だけで、宇都宮のイメージは大分違うはずだ。

5.2.2「みどりと暮らすまちなかづくり」

まちなかのみどりを豊かにし、居住・生活の場としての魅力を高めていくための提案である。

○街路樹の配置を見直す（４）

宇商通り～東通り～今小路通りや、奥州街道のまちなかの区間（**写真９**）は街路樹がなく、緑地帯もないに等しい。そこで、これらの区間には近年各地で採用され、栃木県内の国道でも多く用いられているハナミズキを**写真 10** のように街路樹として配置する。ハナミズキは極端に大きくなりすぎず、花も咲くため見た目もよく、街路樹に適しているといわれている。

また、管理上等からトチノキの街路樹を維持することが困難なところでは、トチノキをハナミズキに順次植え替えることとする。ここで撤去したトチノキは提案５・６で活用することができる。

写真９　街路樹がない奥州街道

写真 10　ハナミズキの街路樹の例

（提供：国土交通省　宇都宮国道事務所）

○生態回廊を作り出す（５）

まちなかにみどりを増やすだけではなく、みどりの有する多様な役割を発揮させることも重要である。そこで、みどりを連続させて生態回廊を作り出す。これによってまちなかに動植物の移動経路や生息場所を確保し、人々が身近に自然を感じられるようにする。たとえば、宇都宮城址公園のお堀の回りにシダレザクラを植え、城址公園から市役所を通って大通りまでをイチョウでつなぎ、県庁までのトチノキの並木を通って、県庁の広場に行く。そこにはトチノキ（提案４で移設が必要になったものを活用する）の小さな森をつくる。これにより、城址公園から市役所・県庁を通って八幡山公園までの生態回廊とする。

○まちなかの公園にシンボルツリーを設置する（６）

まちなかの公園に、より印象を持たせるために各公園にシンボルツリーを設置する。このシンボルツリーには、提案４で植え替えが必要になったトチノキを用いることができる。

5.2.3「みどりに対する意識を変える」

みどりを豊かにすると同時にまちなか自体の魅力を向上させるためには、ハードの整備のみではなく、住民やまちを利用している人々の意識も変えていくことが必要である。

〇街路樹の剪定方法を見直す（７）

現在の剪定は維持管理上の観点から行われているが、街路樹が持つさまざまな機能を果たすようにするには剪定方法の見直しが必要である。

しかし、市域全体を対象とした見直しは費用面から考えてもすぐには実現できない。そこで、まずはまちなかの一定のエリアを選び、街路樹の持つさまざまな機能に配慮した剪定方法を採用する。これによってみどりの存在感を再認識してもらい、人々にまちなかの魅力について考えてもらうきっかけをつくる。

〇みどりに関するフォーラムを開催する（８）

緑化に関するイベントは行われているが、そのほとんどが郊外の森林に対するものである。樹木の里親制度等はあるが、みどりを通してまちなかの魅力について考える機会は多くない。そこで、緑化フェア等にあわせて、広く市民を対象としたまちなかのみどりを考えるフォーラムを開催する。これにより、まちなかの魅力とみどりの豊かさの関係について考える機会を与え、魅力あるまちなかを目指すための土台とする。

６．試算

(1) ハナミズキを、駅周辺の奥州街道と、宇商通り～今小路通りのあわせて約１キロメートル（両車線の歩道上）に新たに植樹すると、約 2,775 万円の費用がかかる。

＜試算の根拠＞
ハナミズキ（高さ 3.5 メートル）…１本 66,000 円＋植樹費用 45,000 円
植樹間隔を８メートルとすると、1,000 メートル÷８メートル×２＝250 本
（66,000＋45,000）×250＝27,750,000

(2) シダレザクラを宇都宮城址公園のお堀の周り約 200 メートルに植樹すると、 約２百万円の費用がかかる。

＜試算の根拠＞
シダレザクラ（高さ 3.5 メートル）…１本 27,500 円＋植樹費用 45,000 円
植樹間隔を８メートルとすると、200 メートル÷８メートル＝25 本
（27,500＋45,000）×25＝1,812,500

(3) イチョウを市役所と宇都宮城址公園までの約 70 メートルと、大イチョウから大通りまでの約 500 メートルに植樹すると、 約９百万円の費用がかかる。

＜試算の根拠＞
イチョウ（高さ 3.5 メートル）…１本 19,000 円＋植樹費用 45,000 円
植樹間隔を８メートルとすると、(500+70)メートル÷８メートル×２＝143 本
（19,000＋45,000）×143＝9,152,000

以上はこの提案の一部の区間に対する植樹の費用の試算である。この試算には、既存の街路樹を撤去・移設するための費用は含まれておらず、実際にはこれらの費用が別途必要である。また、維持管理費用の増加分については試算していない。

７．さいごに

当研究会では、この提案のために宇都宮のまちなかにおけるみどりの現状を調査してきた。現状では確かに、他都市に比べてみどりが少なく、街路樹があってもその機能が十分には活かされていない印象を受ける。しかしながら、それは宇都宮がこれからもっと良くなっていく余地があるということでもある。みどりや街路樹は広い範囲に大量に植えなくても、宇都宮の玄関口となるところや中心市街地の目立つところなど限られたところに集中的に整備し、それを適切に維持管理することにより、宇都宮のイメージを大きく変えることが可能である。みどりを有効に活用することにより、V-Plan のテーマの一つである宇都宮のまちなかの魅力向上が実現することを願っている。

最後に、フォーラムを主催していただいた財団法人栃木県青年会館の皆様、ご講演いただいた本学の大久保副学長、仙台市建設局百年の杜推進部の菊池さん、特定非営利活動法人都市デザインワークスの榊原さん、また、お忙しい中ヒアリングの対応をしてくださった宇都宮市公園緑地課、宇都宮市道路維持課、栃木県環境森林政策課、栃木県宇都宮土木事務所、国土交通省宇都宮国道事務所の各ご担当者の皆様に、紙面を借りて深く御礼申し上げます。

＜参考資料＞

○ **「街路樹の緑化工―環境デザインと管理技術」**
亀山 章　編集
ソフトサイエンス社（2000/04）

○ **「杜の都の環境をつくる条例　あらまし」**
発行：仙台市

○ **「百年の杜づくり　杜の都の緑の分布」**
発行：仙台市